

『法華経』方便品の「諸法実相」の原義について

菅野博史

はじめに

鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』方便品の「仏の成就する所は第一の希有なる難解の法にして、唯だ仏と仏とのみ乃し能く諸法の実相を究尽す。謂ふ所は諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」(大正九・五下)は、天台大師智顛(五三八―五九七)が、この経文を重要な契機として一念三千説を形成した⁽¹⁾ことから、古来有名である。但し、『法華経』の梵本の対応箇所では、「諸法実相」の「実相」に対応する原語が見られないこと、いわゆる「十如是」に対応するものが完備せず、五つの疑問文となっていること、そして、前者については、鳩摩羅什が

「実相」に対応するサンスクリット原語の無い場合でも、適宜「実相」の訳語を使用していること、後者については、鳩摩羅什が『大智度論』卷第三十二に出る体・法力・因・縁・果・性・限礙・開通方便の九事⁽³⁾を参考にし、て補訳したものであろうこと、などが研究者によって明らかにされてきた⁽⁴⁾。

ところが、この文の「諸法」の意味については、「存在するもの」「現象」「あらゆるものごと」などとほぼ同じ方向での理解が見られ、これまで異議がほとんど提出されなかったようである。そもそも、インド思想、仏教における「法」(dharma)は多くの意味を持つが、本研究に關係する範囲に限定すると、「經驗的事物」の意味と、「徳」(guna)⁽⁵⁾の意味とが注目される。前者は仏教に特

有の意味とされるもので、色法、心法を含む一切法、すなわち、物質的存在や(煩惱などの)精神的存在を包括する現象界(但し重点はあくまで自己存在に置かれるのが仏教の宗教としての特徴である)の意味である。既述の「存在するもの」「現象」「あらゆるものごと」などの解釈もこの例である。後者は「十八不共仏法」の「法」などに見られるものであり、「特性」の意味である。

上に述べたような鳩摩羅什訳の「諸法」の解釈は、『法華経』の梵本の解釈にもその影響があり、たとえば岩本裕氏の訳でも、この部分の訳は「如来は個々の事象を知っており、如来こそ、あらゆる現象を教示することさえできるのだし、如来こそ、あらゆる現象を正に知っているのだ。すなわち、それらの現象が何であるか、……」⁽⁶⁾となつていのである。しかし、改めて梵本の文脈に沿

って考察を加えると、この「諸法」の原義は、如来たちが無数の仏陀のもとでの長い間の修行によって身につけ、知った如来たちの「特性」の意味であると考えられる。

そして、この如来たちの「特性」の内実は、「仏陀の知」(仏智、仏知)、仏という「修行の結果」(仏果)という概念に集約されると考えられる。方便品の文脈を素直に辿れば、この筆者の提案の妥当性が承認されるのではないかと期待される。いま、梵本からの翻訳は、松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義氏の翻訳⁽⁷⁾を使わせていただいたが、一部改めた点もある。なお、()の中に、とくに「法」(dharma)に関連する箇所を中心に、対応するサンスクリット原語を挿入する。また、適宜、文章を区切り、とくに、「法」の意味を解釈する上で、重要な段については、その内容を分析する。

I 『法華経』梵本の方便品の冒頭の内容分析

①「そのとき、実に、世尊は念いも新たに気持を正しくして、この三昧から立ち上がられた。三昧を出られてから、尊者シャーリプトラ(舍利弗)に告げられた。――」

② 「シャーリプトラよ、正しくさとしたかた、尊敬さ

るべきかたである如来たちは、深遠で究めがたく、さとりがたい仏陀の知を (buddhājñānam) さとっているのであり、(その知は) すべての声聞や独覚たちにとつては、知ることの困難なものである。」

ここでは、如来たちは仏陀の知をさとっているが、すべての声聞や独覚たちにとつては知り難いことが述べられている。

③ 「それはなぜかといえば、シャーリプトラよ、正しいさとりを得た尊敬さるべき如来たちは、実に幾百・千・コーティ・ナユタもの多くの仏陀に仕え、幾百・千・コーティ・ナユタもの多くの仏陀のところで修行をして、長いあいだ最高の正しい菩提に向かつてふみすすみ、精進努力して、稀有であり未曾有である法を身につけ (āścaryādbhutadharmasamanvāgatā)、知りたい法を身につけ (durvijñeya-

dharmasamanvāgatā) 知りたい法を知っておられる (durvijñeyadharmānjñātavinah) からである。」

ここでは、②の理由として、如来たちは無数の仏陀のもとでの長い間の修行によって、稀有、未曾有の法を身につけ、知り難い法をそなえ、知り難い法を知っているからと言われる。この「法」は、長い間の修行によって、身につけられ (samanvāgatā)、知られた如来たちの「特性」を意味すると考えられる。そして、この「特性」は稀有、未曾有であり、如来以外の者には知り難いと言われる。本稿で問題とする「唯仏与仏乃能究尽諸法実相」に対応する梵本の「諸法」の原義は、まさしくこの意味であろうと思う。なお、②では、知り難い対象として「仏陀の知」が挙げられていたことに注意しておきたい。

④ 「シャーリプトラよ、正しいさとりを得た尊敬さるべき如来たちが深い意味を秘めて語られたことばを (ほんとうに) 知ることは、容易ではない。」

⑤ 「それはなぜであるか。(如来たちは) みずからに明証である法 (svapratyayan dharman)、いろいろな巧みな方便と知見によって、すなわち原因や理由や喩えや根拠やことばの解釈や (教理の) 設定によって、説き明かす (prakāśayanti) からである。そして、それはそれぞれに応じた巧みな方便を用いて、それぞれがったことに執著している衆生たちを解脱させるためである。」

ここでは、如来たちが、長い間の修行によって、身につけ、知った如来たちの「特性」を、巧みな方便と知見によって、さまざまな方法を駆使して説き明かすと言われる。

⑥ 「シャーリプトラよ、正しいさとりを得た尊敬さるべき如来たちは、偉大なる巧みな方便と知見との最高の極地に達せられている。(彼らは) 執著なく、障害のない知見を有し、(仏陀としての) 十の(力)、(四つのおそれなき自信、(十八の仏陀に) 特有な性質、(五つ

の) 機能、(五つの) 能力、(七つの) さとりを助ける部分、禪定、解脱、三昧、等至という、未曾有の徳性をそなえ (asaṅgāpratihata-jñānadarśana-bala-vaiśāradyāvenikendriya-bala-bodhyāṅga-dhyāna-vimokṣasamāpatti-samāpatty-adbhutadharmasamanvāgatā) 種々の教えを説く (vividha-dharma-samprakāśakāh) ののである。」

ここでは、如来たちが身につけている未曾有の法 (adbhutadharmā) の具体的な項目が列挙されている。如来たちが無数の仏陀のもとでの長い間の修行によって身につけ、知った如来たちの「特性」は、具体的にはここに列挙されているものである。換言すれば、仏の内実はこのような徳目によって構成されているのであり、その内実はある場合には、上の②や後に引用する偈頌のように、より端的に「仏陀の知」、仏という「修行の結果」と表現されるのである。訳文に「未曾有の徳性」とあるが、筆者は、この意味を「唯仏与仏乃能究尽諸法実相」に対応する梵本の「諸法」の意味に十分に適用できるこ

とを提案したい。

そこで、訳文に「種々の教えを説く」となっている箇所について一言したい。この *dharmā* を「教え」と訳すことは、形容語として *vividha* が付いているからであろうが、それではこの前後に出る *dharmā* の意味の一貫性が無くなるので、⑤に示されたように、さまざまな方法を駆使して、如来たちが身につけている「種々の」未曾有の法を説くの意に解釈したい。

⑦ 「シャーリプトラよ、こういうだけで、すなわち、正しいさとりを得た尊敬さるべき如来たちは最も稀有なるものを獲得されている (*mahāścāryādbhuta-prāptāḥ*)、というだけで、満足すべきである。」

ここでは、「如来たちは最も稀有なるものを獲得されている」というだけで満足すべきであり、その内容については簡単に説くことができないことが指摘されている。「最も稀有なるもの」に *dharmā* の語はないが、内容的には既に出た「稀有であり未曾有である法」と同じ

と考えてよいであろう。

⑧ 「シャーリプトラよ、如来が知る法 (*dharmāṃs*)、その法を (*dharmāṃ*)、如来こそが如来に対して説かれるのである。あらゆる法をすべて (*sarva-dharmān*)、シャーリプトラよ、如来こそが説くのであり、あらゆる法をすべて (*sarva-dharmān*) 如来のみが知るのである。」

これも、長い間の修行によって、身につけられ、知られた如来たちの「特性」は、如来以外の者によっては知り難く、説かれない、との意味と解したい。訳文の「あらゆる法をすべて (*sarva-dharmān*)」を、現象の意味とは取らずに、これまでの文脈上、仏陀の実現した「特性」のすべてと解するのである。

⑨ 「それらの法はなんであるか (*ye ca te dharmā*)、それらの法はどのようなにあるか (*yathā ca te dharmā*)、それらの法はいかなる様態か (*yādrśās ca te dharmā*)、

それらの法にはいかなる特質があるか (*yaḥ lakṣaṇā ca te dharmā*)、それらの法にはいかなる本性があるか (*yaḥ svabhāvas ca te dharmāḥ*)。すなわち、それらの法 (*te dharmā*) そのもの、(その) あり方、様態、特質、本性という、これらの法について (*teṣā dharmesū*)、如来だけが直知するのであり、明晰な知を有するのである。」

ここは有名な十如是对應する箇所であるが、梵本では五つの疑問文、あるいは間接疑問文となっていることは既に述べた。この「法」も長い間の修行によって、身につけられ、知られた如来たちの「特性」の意味である。すなわち、如来の身につけている法がなんであるか、どのようなにあるか、いかなる様態か、いかなる特質があるか、いかなる本性があるか、このようなことを、如来のみが知っているのである。

以上、この箇所に出る「法」を、如来たちが無数の仏陀のもとでの長い間の修行によって身につけ、知った如

来たちの「特性」という意味で理解することが可能であることを示した。要するに、方便品の冒頭からいわゆる「十如是」の部分までの要旨は、如来たちが無数の仏陀のもとでの長い間の修行によって、身につけ、知った如来たちの特性は、如来だけが知っているのであり、如来だけが説くことのできるものであることを強調したものである。そして、このような如来が身につけている多くの特性を端的に、②に出た「仏陀の知」と表現しているのではないかと考えられる。偈頌において、如来以外の者によって知ることのできない対象として、「法」と同格的なものとして、「善逝の知 (*sugatasya jñānam*)」(第九偈)、「仏陀の知 (*buddhājñānam*)」(第十一偈)などが挙げられていることを合わせ考えるべきであろう。

II 対応する偈頌の考察

上に述べた「諸法」の原義についての新しい提案は、対応する偈頌、あるいは内容的に同類の記述の見られる偈頌を参照することによって、より妥当なものとして承

認されるであろう。以下、関連する偈頌を傍証として列挙する。⁽⁸⁾

「およそ彼ら（仏陀）にある力と解脱とおそれなき自信とがどのようなものであるか、またおよそ仏陀の特性（buddha-dharmas）がどのようなものであるかを、だれにしても知ることはできない。」（第二偈）

「幾コーティもの（多くの）仏陀に仕えて（わたくし世尊が）かつて行なった修行は、深遠で微妙であり、知りにくく、非常に見きわめがたい。」（第三偈）

「思惟を超えた幾コーティもの劫にわたって実行した修行の結果（phalam）がどのようなものであったか、それを私は菩提の座において見た。」（第四偈）

「それがどんなあり方であり、どのようなものであり、またその様態がどのようなものであるかという

ことについて、私も知っており、他の世間の指導者たちも知っている。」（第五偈）

「もろもろの深遠な法（gambhira-dharma）、それは微妙でもあり、また（その）すべては（世の常の）思議を越え、汚れを離れている（無漏）が、（それらが仏陀によって）さとられたのである。（その法が）どのようなものであるかを、いまや私も知っているし、またそれら十方の世界の勝利者たちも（同様に知っている）のである。」（第十八偈）

ここでは、誰も知ることができず、如来だけが知っているものは、「仏陀の特性」であり、「修行の結果」とさされている。これを要するに、如来たちが無数の仏陀のもとで、長い間修行してわが身に実現し、明確に知った仏陀の「特性」を、「法」（dharma）と表現したのであり、これは「仏果」のことでもあり、「仏知」のことでもある。したがって、問題の「唯仏与仏乃能究尽諸法実相」の原

義は、「仏だけがはじめて仏の実現している特性を理解することができる」「仏のことは仏しか理解できない」ということであり、仏果、仏知の偉大さを強調したものと解釈すべきではないかと思う。

III 鳩摩羅什の訳

これまで梵本における「諸法」の原義について考察してきたのであるが、鳩摩羅什訳における「諸法」の解釈としては、「現象界」などと解釈する従来の解釈が正しいのであろうか。換言すれば、鳩摩羅什自身はどのような理解を持っていたのであろうか。筆者としては、如来たちが無数の仏陀のもとで、長い間修行してわが身に実現し、明確に知った仏陀の特性という意味を読み取ることは、鳩摩羅什の訳文に対しても可能ではないかと考えられるが、とくに、この長行に対応する偈頌を参照すると、一層そのように考えることが可能なのではないかと思われる。関連する偈頌を引用する。

「世雄は量る可からず。諸天、及び世人、一切の衆生の類は能く仏を知る者無し。仏の力、無所畏、解脱、諸の三昧、及び仏の諸の余の法は、能く測量する者無し。本と無数の仏に従ひて、具足して諸の道を行ず。甚深微妙なる法は、見難く了す可きこと難し。無量億劫に於て、此の諸の道を行じ已って、道場にて果を成ずることを得、我れ已に悉く知見す。是くの如き大果報の種種の性相の義をば、我れ及び十方の仏は乃ち能く是の事を知る」（大正九・五下）とある。ここでも、やはり、無数の仏のもとで修行して実現した仏としての大果報が、仏以外の誰にも知ることができず、仏と仏とだけが知ることであることを強調している。また、

「又た舍利弗に告ぐらく、『無漏不思議の甚深微妙の法をば、我れ今已に具得す。唯だ我れのみ是の相を知る。十方の仏も亦た然り……』」（大正九・六上）を参照すれば、仏が我が身に備えた無漏不思議の甚深微

妙の法の特徴を、仏たる自己と十方の仏だけが知っているということの意味しているものであり、決して「現象」を知っていることを言ったものではないことは明らかである。本稿では、方便品の「唯仏与仏乃能究尽諸法実相」の「諸法」の原義を梵本によって考察することを目的とし、鳩摩羅什の訳文の解釈については主題的に扱うことはできないが、筆者の新しい解釈が鳩摩羅什訳にも適用される可能性について一言した。

以上、鳩摩羅什訳の「諸法実相」の「諸法」の原義は、従来の「存在するもの」「現象」「あらゆるものごと」などの意味ではなく、如来たちが無数の仏陀のもとでの長い間の修行によって、身につけ、知った如来たちの「特性」の意味であり、その内実は、究極的には「仏陀の知」、仏という「修行の結果」であることを示した。筆者の力量不足で、この新しく提案した解釈の妥当性を厳密に論証するにはほど遠い議論であったが、方便品の冒頭からのごく短い箇所に出る「法」の意味に一貫性を持た

せるべきではないかということ、また、「法」の意味は、少くとも如来によって身につけられ、知られたという限定が付けられるべきものであり、決して「存在するもの」「現象」「あらゆるものごと」などという一般的な拡散した意味ではないこと、また、「法」の意味は、単に客体的な真理や、仏陀によって知られた悟りの世界と表現されるものであるよりも、むしろ、如来だけが自己に実現している主体的なものではないか、そして、その主体的なものとはとりもなおさず仏知、仏果のことではないか、などという着想によって本稿は執筆された。

註

- (1) 拙稿「天台大師智顛と『摩訶止観』」(『創価大学人文論集別冊・フォーラム人文』一、一九九〇年七月)を参照。
- (2) 『法華経』の梵本は、*Saddharmapundarika*, ed. by H.Kern and B. Nanjio, St.-Petersbourg, 1908-12 による。
- (3) 「復次一一法有九種。一者有体。二者各各有法。如眼耳雖同四大造而眼独能見耳無見功。又如火以熱為法而不可潤。三者諸法各有力。如火以燒為力水以潤為力。四者諸法各自有因。五者諸法各自有緣。六者諸法各自有果。七者諸法各自有性。八者諸法各有限礙。九者諸法各各有開通方便。諸法生時、体及余法凡有九事」(大正二五・二九八下)を参照。

- (4) 本田義英「十如本文に対する疑義」(十如本文論批評に答ふるの資料)「十如本文否定の積極的論料」(『仏典の内相と外相』三五九―四一九頁、一九三四年、弘文堂書房)、紀野一義『法華経の探求』(一九六二年、平楽寺書店)八七―一二三頁参照。
- (5) 平川彰「原始仏教における「法」の意味」(『平川彰著作集1・法と縁起』所収、一九八八年、春秋社)を参照。
- (6) 『法華経(上)』(岩波文庫)六九頁。
- (7) 『法華経1』(『大乘仏典4』、一九七五年、中央公論社)三九―四一頁を参照。
- (8) 同前・四一―四三頁を参照。

(かんのひろし・創価大学助教授)